

あすなろ

2023年11月1日

みみレター 第7号

兵庫県立姫路聴覚特別支援学校
校内支援部 (文責 田路)

「アバター (分身) 接客」

コンビニ大手ローソンが実験的に導入

コンビニ大手ローソンは、「アバター (分身) 接客」を活用して深夜帯も含む店舗の省人化を図る実験を始めています。アバターを操作する社員 (LAO=ローソンアバターオペレーター) はローソン本社や自宅でパソコンの前に座り、店内に設置した画面に付属したカメラで店内を確認して客の問いかけに応じます。LAOが表情を変えたり手指を動かしたりすると、そのまま画面のアバターに反映されます。素顔で接客したくない人でも働きやすいのが特徴です。また、映像を伴うアバター接客なら手話にも対応できるとみられます。ただ、LAOが両手を重ねたり、左右の手の奥行きに差があったりした場合にうまく表現できないため、アバターが手ぶり等で何を表現しているかが客に伝わるかどうかの検証を始めています。ローソンのアバター店員は、東京、大阪、福岡に導入されており、今後は、現在30人ほどのアバター店員を2025年度までに1000人程度に増やす方針です。

出典：https://www.asahi.com/より

9月23日「手話言語の国際デー」

2017年12月19日に国連総会で決議されました。決議文では、手話言語が音声言語と対等であることを認め、ろう者の人権が完全に保障されるよう国連加盟国社会全体で手話言語についての意識を高める手段を行うことを促進するとされています。また、9月23日は1951年に世界ろう連盟 (World Federation of the Deaf: WFD) が設立された日でもあります。2023年のテーマは「世界中のろう者が、どこでも手話言語でコミュニケーションできる社会へ!」でした。また2022年より、WFDからの働きかけで、世界各地で、WFDのロゴの色である「世界平和」を表す青色にライトアップされました。姫路市では、姫路城やアクリエひめじでライトアップされました。出典：https://www.jfd.or.jp/より

↑ 遠隔地にいる社員のアバターが店内の画面を通じて接客する様子

手話言語の国際デー

2023年のロゴ →



INTERNATIONAL DAY OF SIGN LANGUAGES

ドラマ

「デフ・ヴォイス 法廷の手話通訳士」

近年、手話やろう者の世界について、テーマとして取り上げたドラマが放送されたり、海外でも高い評価を得る映画が公開されたりするなど、社会的な関心が高まっています。2025年には世界規模で行われる聴覚障害者のための総合スポーツ競技大会「デフリンピック」が日本で初めて開催されることが決まっており、「ろう者・ろう文化」についての理解がより広く求められていると言えます。そんな今日的な題材に向き合ったドラマが放映される予定です。原作は、丸山正樹さんによる小説『デフ・ヴォイス 法廷の手話通訳士』です。“読書の甲子園”と言われる全国高校ビブリオバトルでグランドチャンプ本にもなりました。

本作の主人公・荒井尚人はろう者の両親の間に生まれた耳が聴こえる子ども、コーダ（Children of Deaf Adults の略）であり、自身の生き方や他者との関わり方について悩み、現在と過去の事件を追う中で自身が果たして何者なのか周囲の人から問われ自分自身にも問いかけることになる人物です。ドラマの中では、主人公の草薙剛さんが手話を使って演じるシーンもあるそうです。

またドラマ化に際してオーディションを行い、20名近い「ろう者・難聴者」のほぼすべての役を実際にろう・難聴の俳優が演じる試みがなされています。これに関して、演出家の方が次のようにコメントしています。「その表情の豊かさ、あたたかさ。表現の多彩さ、細やかさ。手話の「手」だけではなく、顔や全身を使った感情表現に圧倒されました。何よりも皆さんが「演じる」ことを心の底から楽しんでいる。こんなに楽しく、そして刺激的なオーディションは初めてでした。」演劇の世界における夢“ろう者役はろう者俳優で”が実現できたことに、手話の広まりを実感しました。 出典： <https://www.nhk.or.jp/>より



ほ ち ょ う き て ん ら い こ う び 補聴器店 来校日

< 13:10~ 通級教室 >

- 神戸ヒヤリングセンター 11月9日(木)
- トーチン姫路補聴器センター 11月17日(金)

補聴器の故障や買い替え、作替の作り替えの際は、補聴器店 来校日を確認して、担任にお申し出ください。

